

「地域と学校の新しいカンケイ」～WIN WIN より Happy Happy～

【7月19日放送内容】

DJ：今回は、尼崎北小学校の活動について、尼崎北小学校のコーディネーターの能登さんと社会教育課の増田さんにお話をお伺いします。お二方、よろしくお願いします。

能登・増田：よろしくお願いします。

DJ：まずは、能登さん。尼崎北小学校では、ずいぶん前から地域と学校の連携を進めておられて、平成28年度に地域学校協働本部のモデル校としてスタートしたとお聞きしましたが、尼崎北小学校ではどのような先進的な取り組みをされていますか。

能登：尼崎北小学校は、以前から子どもたちのために地域で学校を支援する活動が盛んで、登下校の見守り、夜間パトロール、学校支援ボランティア、スポーツ活動、郷土学習など幅広い支援活動を行ってきました。様々な活動を通して子どもたちと触れ合い、子どもたちの成長を直接感じる事が、地域の方の喜びとなっています。

DJ：そうなんですね。以前から、たくさんの地域の方の支援があったということですね。では、能登さんは、尼崎北小学校のコーディネーターとして、どのような思いで関わっていらっしゃるのでしょうか。

能登：尼崎北小学校の校区では、昭和の頃から富松神社を中心にコミュニティでお祭りや自然観察、伝統野菜の収穫祭など、様々な活動が行われてきました。尼崎北小学校の子どもたちの地域学習に大きな影響を与える存在になっています。私は、神社を中心とするコミュニティと地域住民のお力を尼崎北小学校の子どもたちのために、最大限活用するよう心掛けています。

DJ：地域と学校が連携するためには、どんな工夫をされていますか。

能登：地域連携会議を年3回程度開催しています。会議の趣旨は、「尼崎北小学校の教育に協力くださっている地域の方が、お互いの学校支援について情報交換をする」。もう一つは、「今後の学校の教育の推進のため、学校と地域の連携を一層密にする」ということで、現在、学校支援にかかわる17の団体の代表の方に参加していただいています。

DJ：なるほど。地域の方が集まった会議では、どのようなことが話し合われているのでしょうか。

能登：昨年11月の会議では、「新型コロナウイルス感染流行における学校の現状」や「子どもたちの登下校の見守り活動」「コミュニティ・スクールの設置」について話し合いました。

増田：尼崎北小学校の地域の方は、「私たちの地域の子ども」という思いが強く、いろんな課題に対しても主体的に関わってくださっていると感じます。

DJ：では、尼崎北小学校の主な活動を紹介していただけますか。

能登：はい。登下校の見守りについて紹介します。見守りの団体は、塚口西住宅まちづくり防犯グループと東富松曙光会防犯グループの2つあります。塚口西住宅まちづくり防犯グループは、月に1、2回の

登下校の見守りと夜間パトロールを行っています。東富松曙光会防犯グループは、毎朝の登校時と週2回の下校時の見守りをしています。

DJ：地域の方の子どもたちの安全を守るという思いを強く感じますね。

増田：私は、通勤の途中に尼崎北小学校の近くを通るのですが、雨の日も、暑い日も、寒い日も地域の方が黄色い旗を持って交差点に立っておられ、子どもたちだけでなく、通勤、通学で通る方々の安全も守っておられますよ。

DJ：はい。それは本当に心強いですね。

能登：次に、授業支援についてですが、6年生の国語の授業で、毎年能楽コーディネーターの方から能・狂言師の紹介や伝統文化について子どもたちにお話しいただいています。「狂言」の歴史や「能」との違い、使用する楽器や舞台について説明いただいた後、舞台での足運びや面をつける体験をしました。最後に「柿山伏」の狂言を披露していただきました。子どもたちは普段触れる機会が少ない伝統芸能を身近に感じることができました。

DJ：そうなんですね。「狂言」や「能」を鑑賞することは、日常生活ではあまりないですもんね。子どもたちはとても貴重な体験をすることができましたね。他に、地域の方が授業で子どもたちに教えてくださっていることはありますか。

能登：はい、伝統野菜の「富松一寸豆」の栽培があります。

DJ：富松一寸豆ってどんな豆なんでしょう。

能登：富松一寸豆は、昔から稲作の裏作として尼崎市北部の立花・武庫地区の村々で栽培されている「そらまめ」ですが、とりわけ富松の里で獲れる豆は、粒が大きく柔らかくてとってもおいしいと評判で、「富松一寸豆」と呼ばれています。

DJ：へえ。初めて聞きました。そらまめのことなんですね。

能登：はい、そうです。地域の方にご協力いただいて、11月に尼崎北小学校の3年生の子どもたちが、一寸豆の苗を地域の方が貸してくださった畑に植えました。そして、次の年に4年生になった子どもたちは、立派に育った一寸豆の収穫を行うことができました。収穫のときには、自分たちが植えた一寸豆が大きくなっていることをとても喜び、満面の笑みを浮かべながら、袋がいっぱいになるまで収穫していました。地域の方が畑を貸してただけでなく、収穫できるまで一生懸命にお世話をしてくださって、子どもたちは貴重な体験ができました。子どもたちは、地域の方々が温かく見守り、自分たちのことを大切に思ってくださっていることを感じていると思います。

増田：収穫の時期には、富松神社の境内で「富松一寸豆収穫祭」が行われます。一寸豆の塩ゆでの試食会や豆ごはんの販売、豆飛ばしコンテスト、落語会で大変賑わっていました。一寸豆の即売会では、一寸豆を求めて長蛇の列ができていました。

DJ：へえ～。そうなんですね。歴史ある富松一寸豆が地域の方に愛され、また、子どもたちにも収穫の喜びを味あわせる素晴らしい取組みだと思います。

能登：次は、富松の鬼をご紹介しますね。

D J：富松の鬼？初めて聞きました。

能登：はい、毎年節分の日朝、富松神社氏子青年会の皆さんが富松の鬼に扮し、校門で登校してくる子どもたちを迎えています。1年生の子どもたちは「うおー！」と近づいてくる初めて見る鬼の姿に驚き怖がりですが、2年生以上の子どもたちは、怖い鬼じゃないことを知っているのです、笑顔でハイタッチをしています。教室に入ってから、窓から手を振ったり、声をかけたりしています。富松の鬼は、尼崎北小学校をスタートし、地域の小学校や幼稚園を中心に11か所を回られました。

増田：尼崎で語り継がれている「茨木童子」のお話に出てくる鬼で、恐ろしい容姿のため自分を捨てた親のお見舞いに駆け付ける心優しい「親孝行の鬼」なんですよ。

能登：そうです。例年は、校門で鬼が子どもたちを迎えたあと、体育館に全校生が集まり、「茨木童子」のお話を聞きながら、尼崎の歴史について学んでいます。昨年と今年は、新型コロナウイルス感染症対策のため、集会は行わず校内放送になりました。

D J：そうなんですね。こういった伝統的な行事が残っているんですね。これからも、子どもたちに尼崎の歴史が語り継がれて、地域への愛着が育まれていく取組みが続いていくといいですね。さて、尼崎北小学校は、今年から地域とともにある学校、コミュニティ・スクールをスタートされたそうですね。能登さん、これはどのような思いで設置されたのでしょうか。

能登：これまでの地域と学校の連携をさらに進めて、地域と学校が一体となって子どもたちを育む「地域とともにある学校」を目指していきます。尼崎北小学校をコミュニティ・スクールとすることで、地域が、学校や子どもたちの最高の応援団になっていきたいです。尼崎北小学校には、数十年の長い期間、地域との連携活動の実績があります。私は1年、2年の短期目標ではなく、50年、100年先も尼崎北小学校と地域住民が子どもたちのために共に手を取り合う関係を築けることを目指し、今後も活動を続けていきたいと思っています。

増田：私もコミュニティ・スクールのディレクターとして、尼崎北小学校が目指す「地域とともにある学校」づくりを支えていきたいと思っています。

D J：これからの尼崎北小学校の地域と学校の連携がどのように進化していくのか、とても楽しみです。さて、今回は尼崎北小学校のコーディネーターの能登さんと社会教育課の増田さんにお話をお伺いしました。お二方、どうもありがとうございました。

能登・増田：ありがとうございました。

D J：さて、8月の放送では、近松の取組みを通じて地域と学校が連携している下坂部小学校の活動をテーマに、下坂部小学校コーディネーターの石田さんと増田さんとの3人でお送りします。それでは、次回の放送もどうぞお楽しみに。